
少年とヤドカリの海

雪静

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年とヤドカリの海

【Nコード】

N8058C

【作者名】

雪静

【あらすじ】

ある咲森町という町にある不思議な海。そこがなぜ有名になったのか。それを紹介していく、青春感動ストーリーです。

初めに

ようこそ咲森町へ。ここは海で有名な所です。ここの海はある時間帯になると、とても不思議なことになるんです。そのため今では外国の方々もこられるような有名な観光地になったのですが、数年前までは誰一人として、見向きもしないような場所だったのです。今からなぜここの海がこんなに有名になったのかを説明してきたいと思います。と、その前にこの話を、スムーズにご理解いただくために今からお配りする。登場人物を見てください。皆さんがそれを読み終えたらこのお話をはじめたいと思います。

神宮 夜（じんぐう よる）・・・咲森町に住む少年。家の裏側にある海が一番気に入っている。隣に住む由紀とは小さいころから一緒に、夜はよく由紀を頼っている。

鈴扇 由紀（れいせん ゆき）・・・咲森町に住む少女。隣に住んでいる夜を弟のように思っている。

神宮 夜美（じんぐう やみ）・・・夜の母親。夜を生んだ後すぐ死んでしまった
もともとからだが弱く、死ぬ前にはがんを患っていた。

神宮 文斗（じんぐう ふみと）・・・夜の父親。夜美が死んでしまったため、父一人だが夜を大切にしようと思っている。職業は何でも屋 主に大工仕事

鈴扇 由利（れいせん ゆり）・・・由紀の母親。由紀のことを常

に心配している。夜と仲良くするのはいいが、もう少し女の子という自覚を持つてほしいと思っている。

鈴扇 翼（れいせん つばさ）・・・由紀の父親。町を有名にするため日々努力中。由紀のことはすべて由利に任せている。咲森町の町長。

読み終わりましたでしょうか。ではここが有名にすることになった一人の少年と一匹のヤドカリのお話を始めたいと思います。

少年とヤドカリ

咲森町という町に神宮 夜という少年が住んでいた。ある日夜が浜辺に行くと、一匹の子犬が捨てられていました。夜は子犬を放って置けなくて家につれて帰ろうとしたのですが、残念なことに夜の父親、文斗は大の犬嫌いだったのです。家では絶対に飼えない、と言われましたが、夜はあきらめきれず。子犬を浜辺で飼うことにした。文斗は夜が浜辺で犬を飼うことにしたのを知って、犬は嫌いだけど夜の決めたことだから応援しよう、と、咲森町の町長。翼に許可を取って、浜辺に犬小屋を作ったのであった。夜はその犬にシロと名前をつけて、毎日毎日遊んでいた。

しかしある日、咲森町に嵐がやってきた。夜は浜辺にいるシロを助に行こうとするのだが、

「父さん離して！！早くシロを助けに行かなくちゃ」

「何を言っているんだ。こんな中出て行ったらお前もただじゃすまないぞ」

「だからってシロを放って置けないよ！！シロ。シローー！！」

嵐の咲森町に夜の叫び声がむなく響く。

次の日、昨日の嵐が嘘のように晴れ渡っていた。しかしそこにはシロの姿はなかった。

「シロ。シローー！！」

いくら夜が呼んでもシロは出て来なかった。夜は、次の日も、その次の日も海に来ていたが、

そこにはシロのために作ってもらった犬小屋があるだけだった。夜はそこでシロとの思い出を振り返っていた。ふと犬小屋の中を見るとそこには一匹のヤドカリがいた。夜はシロとの思い出の場所を汚されたくなくて、そのヤドカリを遠くに放した。けれど次の日、また小屋の中に同じヤドカリがいた。夜はため息をつきながらヤドカリに話しかけた。

「お前いったい何がしたいの」

そう聞くと、ヤドカリは小屋から出ていった。いったいあのヤドカリはなんだったんだろうと思っていると、あるボールが転がってきた。それはいつもシロと遊ぶときに使っていたボールだった。これにはなくならないよう。僕とシロだけが知っている場所に隠しておいたはずなのにどうしてこんな所にあるんだろう……。まさか、

「シロ！！」

思わず叫んでいた。すると下のほうでカチンツと音がした。音のほうを見ると、さっきのヤドカリがいた。

「まさかお前、シロ……。なのか？」

カチンツはさみの音でヤドカリが答える。シロだこのヤドカリはシロなんだ。夜はそう確信した。次の日から夜はそのヤドカリをシロと呼び、文斗に頼んでシロ（ヤドカリ）の家を作ってくれるように頼んだ。文斗は「ヤドカリの家って何だよ」と言いながらも、立派な貝のデザインの家を作ってくれた。夜はシロに会うため毎日浜辺に行った。そして会うごとに、このヤドカリとシロの面影が重なっていく。そして夜は前の明るさを取り戻していった。

しかし、日がたつにつれどんどんシロの元気はなくなっていく。夜は隣の家由紀に相談した。由紀が言うにはヤドカリはもともと海に住んでいるから、海に返してあげるのが一番いいらしい。夜はシロをつれて浜辺をこえて海へ行くがそこにあつたのは汚れきつた海だった。夜はこんな所ではシロは元気になれないと思い、海の掃除を始めた。

浜辺・波打ち際・海の中まで必死になって掃除した。しかしその途中で夜は倒れてしまう。

文斗が慌てて病院に連れて行くと最悪の結果がでた。病名はがん。理由は親からの遺伝と不衛生な所で無理をしすぎたことだった。

夜の余命は後一ヶ月だった。

そう申告された後でも夜は海の掃除をやめなかった。夜の頭の中にはシロをきれいな海へ返すことしかなかった。次の日夜が海に行く
と由紀がいた。夜だけにやらせるわけにはいかないと由紀の母親、
由利の反対を押し切って手伝いに来たのだ。由紀が来てから掃除の
ペースが上がった。2人になったのもあるが由紀が汚れるのも気に
せず、一生懸命がんばってくれたからだ

。それから数日後。夜の夢の中にシロが出てきた。そして夜にある
ことを話した。

「夜。今から言うことをよく聞いて。明日僕が丸い玉を渡すから、
塩できれいにこすって食べてみて。そうしたら・・・」

シロが全部言い終わる前に夜は起きてしまった。だが夜が海にいく
と、確かに何かをシロが持っている。夜はそれを家から持ってきた
塩できれいに磨いてから、思いきって一口で食べた。すると、

「夜、僕の声が聞こえる？」

夜の頭の中に声が響く。

「シロ。今話しているのはシロなの？」

夜はシロのほうを向いて聞いた。

「そうだよ。夜、よく聞いてね。今日からは僕達海のみんなも掃除
を手伝うよ。夜たちが海をきれいにしてくれたおかげで僕たちもも
う一度ここに住めそうなんだ。」

夜は突然のことに驚いた。にわかには信じがたいことだっかたらっ
だ。すると海のほうから声が聞こえてきた。

「夜さん俺達にも手伝わしてくれ」「あんな達だけに働かせるわけ
にはいかないよ」「私達は私達の住むところを取り戻してくれた夜
さんにお礼がしたいんだ」「みんな夜さんに感謝しているんです。
ぜひ私達にも掃除をさせてください」

海の中から聞こえるたくさんの声。それを聞いたとき。夜は海に向
かって叫んでいた。

「みんなありがと。みんなでこの海を住みやすくしよう」

そして2人と一匹そして海の生物達によって海はどんどんきれいになっていった。

一カ月後海は見違えるほどきれいになっていた。夜たちはきれいになった海にシロを放した。

シロは一言ありがとうと言うと、海の中に消えていった。シロが見えなくなったと同時に夜が倒れた。夜の命は尽きようとしていた。

夜はすぐ病院に運びこまれた。面会の許可が出た時、由紀は夜の部屋に行つて、泣きながら夜に話しかけた。

「夜何してるの。夜がいなくなったら誰がシロたちの海を守るのさ。」

夜は由紀の言葉を聞くとゆっくりと目を閉じて答えた。

「由紀。由紀はしっかりしてるから僕がいなくても大丈夫だよ僕はちよつと無理をしたからもう休まなきゃいけないんだ。」

「夜・・・」

夜はとても悲しそうな顔をしていた。由紀やシロともつと遊びたいでもそれはできない。

夜はすべてを悟っているような顔をしていた。

「由紀。僕、海が見たいな。」

もうすぐ夕日も沈み始める時間。夜も病室からは出てはいけなかったけど、由紀は夜の最後の願いをかなえるため、夜を連れて病院を抜け出した。海に着いたとき由紀と夜は息をのんだ。

海面が虹色に輝いていた。二人がその光景に見とれていると夜の頭の中にシロの声が響いた。

「夜。今まで本当にありがとう。一ヶ月前、僕は夜に出会わなければ死んでいたんだ。僕は結局2回も夜に命を助けてもらったことになるね。僕には夜の命は救えないけど、僕にできる最高のプレゼント。僕の力全部使つてこの海を輝かせ続けるよ。ばいばい。夜」

夜の目から涙がこぼれる。夜は涙をふくとまっすぐ海を見た。

「シロ。僕らずっと友達だからね」

由紀が不思議な顔をして夜を見るがその時すでに夜は覚めることの

ない眠りについていた。

後日談

夜がいなくなってから、数年がたった。

あの時虹色になった海は輝く時間は減ったけど、今でも夕日が水平線に沈む少しの間だけだが、海は虹色に輝く。海を汚さない。ヤドカリや海の生物を大切にする。などを約束した人にだけ咲森町は海を開放している。この海の話は口コミで広がり、今では外国まで知られている。翼はもつと町を有名にしようと色々なところを走り回っている。文斗は翼に頼まれて夜とシロの像をシロの小屋の隣に作った。由利は由紀が自分の道を歩き始めたのを知ってかげながら応援しようと、毎日海の掃除をしている。そして由紀は今咲森町のガイドをしている。ここの海を見る人には夜のことを知ってもらいたい。そう言っただけでも待ちに来る人を案内している。咲森町は、夜とシロの物語で有名になりました。そしてある不思議な言い伝えもできたのです。、ここ咲森町での海が虹色に輝いているとき、たまに不思議な声が海から聞こえてくるそう。それは楽しそう、また悲しそうな話し声で、由紀によるとその声のうちひとつは夜の声らしい。とにかく、その声を聞いた人はその後とても不思議な体験をすることになるらしい。そして、その体験は必ずその人にとつて忘れられない大切な思い出になるそう。

さてこの物語はここまでです。この町の人は夜のことを忘れないでしよう。私はあなたにも忘れないでいてほしいのです。夜とシロの命の光が消えるまでを描いたこの物語を・・・。

後日談（後書き）

初めて完結したお話です。ここまで付き合ってくださいました皆さん本当にありがとうございます。感想、指摘などがありましたら、ぜひ評価に書き込んで下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8058c/>

少年とヤドカリの海

2011年1月7日15時20分発行